

厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）
小児死亡事例に関する登録・検証システムの確立に向けた実現可能性の検証に関する研究
（主任研究者 溝口 史剛）

総括研究報告書

研究代表者 溝口史剛 群馬県前橋赤十字病院

研究要旨

【目的】一人の子どもの死から学び、社会にその情報を生かしていくチャイルド・デス・レビュー(CDR)は、いよいよ本邦においても認知は少しずつ深まり、社会実装に向けた取り組みを試し始めた地域は増えつつある。

本研究は大きく CDR の社会実装に向けた諸問題を整理し、施策反映の基礎資料とするための研究と、フィールドを使った実践的研究である「医療機関を主体とした全国版後方視的小児死亡登録検証」の2つに大きく分かれるが、いずれの研究も少しずつ形が見えてきた。これら2つの研究は互いに相補的に CDR の社会実装に向けた実現可能性を高めるものである。本報告書では、本年度に行った各種の分担研究の内容や作成したコンテンツについて概説する

【結果】これまでの結果を受け、CDR を社会実装する上での論点整理を行い、現時点の CDR 社会実装の研究班案を提示した。また同じく社会実装する上で、もっとも実践の進んだ英国の CDR の手法を深く学ぶために、英国法定ガイダンスやその他の社会的資材について翻訳を行い、英国の CDR の制度設計を担っている専門家へのヒアリングを行い報告書にまとめた。英国以外の国々の状況についてもインタビュー結果をまとめ、提示した。本邦での地域の実践を開始し深める契機としての「医療機関を主体とした全国版後方視的研究」の現状の進行につき報告し、CDR 実践の際に重要なウェイトを占める事故事例の検証例を提示、各地の実践例として、新生児の新たな死亡登録検証の取り組みと、法医-臨床医連携の取り組みの報告を行った。また現状の損傷を伴わない検査手法である死後画像の問題点とその解決の方法を提示するとともに、適切な剖検がなされていくために医療現場における剖検の現状と認識についてのアンケート結果報告を行った。また死亡事例を詳細に検討することが施策に結びついた一例として、東京都のアウトカムについての報告も行った。また社会実装研究を進めるうえで、我々の進むべき羅針盤を確認し修正するため、子どもを亡くした遺族の方との座談会を実施し報告した。また、医療機関におけるグリーフサポートの在り方についても、実践からの方向をまとめるとともに、全国的な状況を調査し、その結果についても報告した。

【考察】CDR の社会実装を進めていくための基盤整備をさらに進めた。CDR を真に有効なものとするための課題をまとめ提示した。最終年度に向けて、さらなる議論を進めガイドラインとしてまとめ上げるとともに、実践研究の報告を受けたエビデンスを提示するための準備は整いつつある。

A．研究目的

昨年度、CDR を社会実装段階に移行するために本研究班が立ち上がり、そのための諸問題を整理し、施策反映の基礎資料とするための研究と、フィールドを使った実践的研究である「医療機関を主体とした全国版後方視的小児死亡登録検証」の登録準備作業を行った。

本年度は、CDR 社会実装の実現性をさらに高めることを目的とし、引き続き上記の対応を進めた。

B．研究方法

研究代表者である溝口は、各分担研究者の研究のサポートを行うとともに、CDR の論点整理を進め、研究班班会議の場や日本小児科学会子どもの死亡登録検証委員会（以下、委員会）の場で、班員や委員の意見を吸収し、CDR 社会実装の委員会案をまとめた。

研究を通じ、英国の CDR 実践と本邦との親和性を確認し、英国の CDR 法定ガイドラインや、遺族へ提供するための各種コンテンツの翻訳を行い、英国の制度設計を行っている立場の人物へのヒアリング作業を行った。

分担研究者の柳川も、諸外国の CDR 立ち上げ段階を学ぶため、各国の関係者へのインタビューを試行し、その状況を報告書にまとめ上げた。

分担研究者の沼口は愛知県における後方視的研究から得た方法論をパッケージ化し、全国を飛び回りその普及に努め、その実践経過につき報告をまとめた。研究代表者の溝口も本実践研究の普及のため、医療者向けの啓発ツールを各種作成し、研究班の HP

(<https://www.child-death-review.jp/>) を充実させた。またその他の研究班員や、委員会メンバーも自身の地域や周辺地域への参加を呼びかけ、多くの都道府県での研究参加協力者との協力関係を結んでいった。

分担研究者の小林は、日本医師会との協力関係の下、いわゆる警察協力医師の検案実務に関する調査を行い、地域住民の信頼の高く、かつ発言力のある医師会の、CDR 社会実装における重要性を明確化した。

分担研究者の藤原は、CDR の社会実装において重要な役割を發揮しうる保健所を対象とした調査を行い、保健所の CDR に果たす役割の可能性と限界につき明示した。

分担研究者の神菌は、成人救急分野における小児死亡と、小児科医との連携体制についての調査を行い、乳児の 10%、幼児の 15%、学童の 20%が、死亡の際に救急医と小児が連携していないことを明らかにした。

分担研究者の山中は、CDR 実践の際に重要なウェイトを占める事故事例の検証例を提示した。事故による死亡は、すべての国民に等しく可能性のありうる事象であり、国民啓発のきっかけとして、本事例をシンポジウムなどで報告し、マスコミに多く取り上げられている。

その他に各地の実践例として、分担研究者の森は、新生児の新たな死亡登録検証の取り組みを紹介した。新生児分野に特化した死亡登録検証制度の模索は、CDR システムとしての CDOP(専門家によるパネルレビュー)の在り方を模索する上で極めて重要である。

分担研究者の岩瀬は、千葉県の研究会の場を活用した、法医-臨床医連携の取り組みの報告を行った。現状で多機関連携が連携したうえで法医情報を活用しうる実践として、各地にこのような取り組みを知っていただくことは情報共有の障壁を如何に取り払うのかを考察する上で極めて有意義である。なおこのような活動を通じ、死亡児対応ガイドラインの作成も行われている。千葉県の研究会の最終的な確認にまで至らなかったため、本年度の報告書に記載することはできなかったが、協力関係のもと全国版としても launch できるように準備していきたい。

分担研究者の小熊は、CDR における重要な側面である「死因究明」における、小児を対象とした死後画像の現状につき調査し、問題点を提起したうえで、適切な対応方法についての提言を行った。

分担研究者の小保内は、適切な剖検がなされていくために医療現場における剖検の現状と認識についてのアンケート結果報告を行った。また死亡事例を詳細に検討することが施策に結びついた一例として、東京都のこども救命センターの実例を挙げ、概説している。また社会実装を進めるうえで、我々の進むべき羅針盤を確認し修正するため、子どもを亡くした遺族の方との座談会を実施し報告した。

分担研究者の菊地はまた、医療機関におけるグリーフサポートの在り方についても、自身の勤務する東京都立小児総合医療センターの実践の報告を行うとともに、全国の病院小児科を対象としたグリーフケアの提供状況についての調査を行い、その結果を報告した。

また我々の本年度のための成果報告と、合同研究へのさらなる参加を促進するために、日本小児科学会と共同開催の形で、「小児死亡時対応講習会」を開催した。その経過や内容については、委員会副委員長で本研究班の研究協力者である仙田昌義医師に、報告書としてまとめていただいた。

それぞれの詳細については、各分担研究報告書をご参照いただきたい。

D．考察、および E. 結語

CDR の社会実装を進めていくための基盤整備をさらに進めた。CDR を真に有効なものとするための課題をまとめ提示した。最終年度に向けて、さらなる議論を進めガイドラインとしてまとめ上げるとともに、実践研究の報告を受けたエビデンスを提示するための準備は整いつつある。

F．健康危険情報

該当なし

G．研究発表

論文発表

なし

学会・シンポジウム発表

なし

書籍発刊

なし

H．知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

なし

